

大澤広晃著

『善意の帝国』

——イギリスのフィランソロピーと南アフリカ——

堀内隆行

二〇一六年一〇月、と言えはもはや一〇年近く前になるが、近世イギリス史研究会でシンポジウム「帝国史はどこへ行くのか?」——新たなイギリス帝国史研究の視座の提示——」が開かれた。

イギリス国内史家が集う同研究会で帝国史のシンポジウムが開催されたのは、自分たちの研究にさまざまな行き詰まりを感じ、その打開策として国内史と帝国史の架橋を思い描いたからだっただろう。シンポジウムには田村理、大澤広晃、稲垣春樹の三氏とわたしに加え、コメンテーターとしてドイツ植民地史の浅田進史氏が登壇した。わたしは当時、国内史家の求めにあまり寄り添う気がなく、翻訳中だったキース・ブレッケンリッジ『生体認証国家』の内容を紹介してお茶を濁した。ところが、そうしたわたしとは対照的に他の三氏、とりわけ大澤氏は種々の研究アイディアを示して問題提起に真正面から応え、そのことが強く印象に残った。

評書

いま改めてシンポジウムの記録を読み返すと、大澤氏は次のように述べていた。「最近では、金澤周作氏の仕事に大きな影響を受けるかたちで：チャリティ／フィランソロピーがイギリス近代

の個性のひとつとして注目を集めている：（そこで大澤氏は）目下、「帝国史における」「人道主義」をフィランソロピーや福祉との関連で理解しようと努めており、それを通じて国内史と帝国史をつなぐことを目指している^①。二〇二四年になって、その成果が本書に結実したことを慶びたい。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 帝国の善意

第一部 イギリス

第一章 「資本家」を糾弾する

——一九二〇世紀転換期の原住民保護協会——

第二章 「救う側」の論理、「救われる側」の不満

——草創期の反奴隷制および原住民保護協会——

第三章 救済をめぐる同床異夢

——戦間期の反奴隷制および原住民保護協会——

第二部 南アフリカ

第四章 隔離と科挙

——ヨーロッパ人・アフリカ人協議会の誕生——

第五章 包摂と隔離のあいだ

——一九二〇—三〇年代前半のヨーロッパ人・アフリカ人協議会——

第六章 広がる可能性、閉ざされる未来

——一九三〇年代後半—四〇年代のヨーロッパ人・アフリカ人協議会——

終章 善意のゆくえ

「序章 帝国の善意」は、二〇〇七年にロンドンのパラメン・スクエアで執り行われたネルソン・マンデラ像の除幕式のエピソードから始まる。この除幕式で（当時存命だった）マンデラは、長年にわたるイギリス人の「善意」に感謝した。だが、帝国の支配者たるイギリス人が被支配者のアフリカ人に向けた善意とは何だったのか。本書では、そうした問いについて考える。その際「善意」を表す言葉としては、よく使われる人道主義ではなく「帝国フィランソロピー」を用いる。それは、第一次世界大戦期まで当事者たちが自らの思想や行為をフィランソロピーと称したからでもあり、またこの語の使用によってイギリスの国内史と帝国史を結び付けることが可能になるためでもある。

序章の後半では、本書が一九世紀末から二〇世紀半ばにかけての南アフリカ、特にアフリカ人の労働をめぐる帝国フィランソロピーを主題に据える点が明らかにされる。第一部ではイギリスを拠点とする原住民保護協会（APS）とその後継団体である反奴隷制および原住民保護協会（ASAPS）、第二部では南アフリカを拠点に活動したヨーロッパ人・アフリカ人協議会が分析対象となる。さらに、アメリカ合衆国などを含む広域のネットワークの把握も謳われる。序章末尾の先行研究については、紙幅の都合もあり基本的に割愛する。しかし、帝国フィランソロピーが南アフリカ史ではしばしばリベラリズムと称され、政治の観点から議論されてきたのに対し、本書は福祉や労働の観点から分析する、としていることは特記したい。

第一章は、APSの歩みをたどる。APSは、イギリス帝国国内での奴隷制廃止から間もない一八三七年に設立され、その組織は、

発起人たちが目的を掲げて募る寄付に立脚する篤志協会型チャリティだった。また会員は、宗教の点では非国教徒のクエーカーら、政治信条に関しては多くが自由党支持者であり、植民地現地にも白人支援者や非白人協力者のネットワークが張りめぐらされていた。APSの主張については、植民地の非白人に対してキリスト教と西洋文明を普及する福音主義フィランソロピーのイデオロギーが強かった。だが同時に、非白人の「伝統」的な土地共同保有の保護を強く訴えた点も特徴のひとつだった。さらに一九二〇世紀転換期になると、APSの主要メンバーには自由党急進派が増え、資本家と帝国主義の関係に対する批判的なまなざしが顕在化した。

第一章の後半は、世紀転換期の南アフリカをめぐるAPSの活動に光を当てる。一八九九―一九〇二年の南アフリカ戦争に関してイギリス政府は、アフリカ人をブール人による搾取から解放するものと正当化した。これに対して帝国フィランソロピストの内閣は、政府の立場を支持する者と戦争に批判的な者とに分裂した。こうしたなかでAPSは、戦争の評価について明言することを避けながらアフリカ人の救済を訴えた。その一方で、鉱山会社の（イギリス系）資本家たちがアフリカ人労働者を搾取している、という言説も、帝国フィランソロピストたちを強く規定するようになった。APSは、戦後も南アフリカのアフリカ人労働問題に関与する。だがそれは、アフリカ人男性の「怠惰」の矯正など、さまざまな偏見に満ちたものだった。他方でAPSは、一九〇六年に成立した自由党政権に期待するものの、その期待は間もなく失望に変わった。一九〇九年に牽引役のH・R・フォックス・

ボーンが死去すると、A P S は他組織と合併してA S A P S が誕生する。

第二章では、A S A P S の誕生から第一次世界大戦期までが扱われる。A S A P S においても、キリスト教（プロテスタントイズム）は引き続き強い存在感を示した。また自由党とのつながりも継続したが、労働党の（後の首相）J・ラムゼイ・マクドナルドなど他党の議員にも働き掛けは行われた。本章ではその後、A S A P S の主要人物たちの思想と主張、宣伝活動が触れられ、章の後半では、南アフリカをめぐる活動に話題が戻る。A S A P S は、一九一〇年の南アフリカ連邦成立に際しての憲法案審議では非白人選挙権の擁護を訴えた。しかし一九一三年の原住民土地法をめぐつては、アフリカ人のリザーブ（指定居留地）への隔離を肯定した。リザーブ内では、A P S 以来重視してきた非白人の伝統的な土地共同保有の保護が容易になると考えたからである。さらに第一次世界大戦期からイギリス帝国では、従属地域に住む人々の受託者として自らが振る舞わなくてはならないとする「信託」の思想が広がったが、A S A P S も、現地住民の「道徳的福利」の向上を目指す信託を唱えた。

第三章では、戦間期におけるA S A P S の活動が考察される。戦間期に入っても、キリスト教の存在感は引き続き強かった。その一方で、イギリス政党政治の再編も反映し、労働党関係者たちとの間に強いコネクションが築かれた（ただし労働党は、帝国への姿勢という点で世紀転換期の自由党急進派の思想から大きな影響を受けていた）。また、一九二〇年代におけるA S A P S の思想と主張には、資本家に対する厳しいまなざしなど以前からの継

続性が見られた。ところが一九三〇年代のイギリス帝国において、非白人たちの抵抗に対する処方箋として福祉への関心が高まると、A S A P S も労働環境の改善を目指す政策を訴えるようになった。本章の後半では、戦間期におけるA S A P S の南アフリカ問題への姿勢が検討される。アフリカ人のリザーブへの隔離を肯定したA S A P S も一九二五年、鉱山労働における特定の職種を白人に限定するカラーバー法案が議会に提出されるとこれを批判した。白人社会に適応したアフリカ人に対しては白人と同等の権利を付与すべきだ、との考えからである。他方で、アフリカ人政治家のジョン・デュベが運営したオシヤンゲ学院への支援には、アフリカ人の金銭感覚に対するA S A P S 側の不信感やデュベ側の戦略なども垣間見える。A S A P S は、一九三六年のケープのアフリカ人選挙権剥奪にも反発した。しかし、南アフリカ連邦はじめイギリス帝国の自治領はすでに本国と対等な地位を獲得しており、本国側からの介入は困難になっていた。

他方で戦間期の南アフリカでは、A S A P S と理念を共有するヨーロッパ人・アフリカ人協議会が活動した。第四章ではその誕生の経緯、組織的特徴や関係者たちの思想が検討される。協議会は一九二一年に、白人とアフリカ人（エリート層）が共同でアフリカ人の福祉に取り組み、人種間の協力を促進することを目的に掲げて創設された。創設に際しては、アメリカ合衆国における人種間協力委員会の結成が大きなインスピレーションを与えた。またアメリカのカネギー財団からの資金援助も多額で、同財団の要求を満たすために、政治的に中立な援助の受け皿としての南アフリカ人種関係研究所が創られた。だがイギリスとのつながりも

多層的であり、協議会は環大西洋帝国フィランソロピー・ネットワークの南アフリカ側の結節点として機能したと言える。協議会の白人フィランソロピストたちは、ASAPSと同様に人種隔離を肯定した。その際には科学とわけ社会人類学が拠り所とされ、隔離に基づき良好な人種関係を構築する道が模索された。ただし協議会のアフリカ人メンバーはこれに批判的で、人種によって区別されない共通の市民権を求めた。本章の末尾では協議会のイデオロギーが、白人たちの国民意識を創出しようとする南アフリカ主義の、アフリカ人にも包摂的なヴァリアントである点が指摘される。

第五章では一九三〇年代前半までの協議会の、アフリカ人の労働に関わる活動が分析されるが、章の前半では一九二〇年代のそれが扱われる。協議会は、ASAPSと同様にカラーバーを批判した。しかし、同一労働・同一賃金は白人労働者の雇用増加とアフリカ人の雇用喪失をもたらす可能性があるため、当面の間アフリカ人の賃金水準を白人より低くとめることが得策だ、とも主張した。協議会はまた、都市に住むアフリカ人の「犯罪」や「不法行為」を抑止する機制として「健全な家族」やレクリエーションを重視した。さらに、協議会は農村部の貧困問題にも関心を示した。第五章の後半では、一九三〇年代前半の協議会の活動が考察される。この時期には、貧困問題を科学的に分析する傾向がさらに強まり、社会調査がその主要な手段の一つとされた。他方で、政府との交渉を重視して漸進的な改革を志向する協議会の姿勢は、アフリカ人の猜疑心を増幅した。また、協議会は都市定住労働者の優遇を主張し、出稼ぎ労働者については「綿密な管理」が必要

であるとした。さらに農村部をめぐることは、その開発が協議会の内部でもいつそう注目を集めるようになった。本章の末尾では、世界恐慌の時代に協議会が実践したアフリカ人貧民救済の取り組みが検討される。

第六章では、一九三〇年代後半から四〇年代に掛けて協議会はどうのように振る舞ったのか、協議会の活動経験はどのようなかたちで他地域に影響を及ぼしたのかが考察される。三〇年代半ば以降になると協議会内でも、リザーブは人口過密で困窮しており独自の発展などとうてい見込めない、との認識が定着した。また、アフリカ人が継続的に都市に住み労働に励むことで労働効率は上がり、より多くの賃金を得ることができれば購買力が向上し、それが南アフリカの経済成長を促す、とも考えられた。さらに、第二次世界大戦期には世界の他地域と同様、南アフリカでも福祉が世論の一大関心事となった。そのなかで、限定的とはいえそこにアフリカ人も包摂すべきだという考えが次第に受け入れられるようになり、協議会のメンバーも、非白人を対象とする社会福祉政策の拡充を訴えた。だが協議会は、白人からは過激と見なされ、アフリカ人からは穏健に過ぎると批判された。一九四八年以降、アパルトヘイトと総称される厳格な隔離政策が段階的に施行され、他方で急進的なアフリカナショナリズムが台頭すると、協議会は衰退局面に入った。しかし、協議会と密接な関係を有していた南アフリカ人種関係研究所は命脈を保つ。加えて、協議会と人種関係研究所の経験は宗主国イギリスにフィードバックされ「イギリスにおける白人・有色人間の理解促進のための協議会」や「イギリス人種関係研究所」が設立された(傍点は評者による)。

終章では、帝国フィランソロピーの理念と活動がその後の南アフリカとイギリスに重要な足跡を残したことが論じられる。帝国フィランソロピーとアパルトヘイトは、アフリカ人（労働者）の都市化に一定の制御が必要だと考える点において共通していた。また帝国フィランソロピーは、勤労を尊び怠惰を断罪する自由労働イデオロギーの普及を助けた。さらに二〇世紀後半以降のイギリスで、とくに発展途上国（多くは旧植民地）を対象とするチャリティが広がり浸透していく過程においても、帝国フィランソロピーは重要な役割を果たした。ただし最後の点と、帝国フィランソロピーを歴史的にどう評価するかは別問題である、と記して本書は結ばれる。

ここまで、本書の内容を紹介してきた。本書の特徴の一つは、イギリスのAPPSないしASAPPSだけでなく南アフリカのヨロバ人・アフリカ人協議会ないし人種関係研究所も主題に据え、（南アフリカ）現地の一次史料を分析している点である。イギリス帝国に限らずヨロバの植民地帝国史をめぐるのは、日本でも過去数十年にわたりさまざまな研究が蓄積されてきた。だが、その多くは各植民地史のコンテクストを踏まえ、仮に踏まえたとしても現地の史料を取り扱うことが少ないままである（こうした研究のことを、冒頭で言及したシンポジウムにおいて浅田氏は「つまみ食い」、評者は「地域史からかい離した」空中戦」「西洋中心主義」と呼んだ）。このような状況にあって、南アフリカ史のコンテクストに根差した本書は真に貴重な成果と言える。また本書は、南アフリカ史の先行研究に対する重要な指摘も含んでおり、その最大のものは、（評者を含め）南アフリカ史研究者が

政治の観点から議論してきたリベラリズムの問題を福祉や労働の観点から分析する、としている点である。ただし、これに関しては後で詳しく述べたい。

本書のもう一つの特徴は、イギリス人がアフリカ人に向けた善意とは何だったのかを問うている点である。この問いは、イギリス帝国における支配の根源的な考察へと通じており、やはり貴重と言える。また「善意」を表す言葉として、よく使われる人道主義ではなく「帝国フィランソロピー」を用いている点も新鮮であり、イギリスの国内史と帝国史の結節はたしかに容易になっている。ただしイギリス的なフィランソロピーの語の使用により、本書のイギリス史としての性格が強化されている感否めない。その結果、例えば第四章では、アメリカ合衆国の人種間協力委員会結成が与えたインスピレーションや、カーネギー財団からの資金援助などイギリス外とのネットワークが検討されているにもかかわらず、それらの印象が薄れているように思われる。しかしそうだとすると、フィランソロピーの語の使用は大いに議論を喚起するものであり、十分な意義を持つことは疑いない。

さて本書が、南アフリカのリベラリズムの問題を福祉や労働の観点から分析する、としている点に戻ろう。そのように言っても、本書が政治の観点を放棄してしまっているわけではない。実際、本書を読めば「協議会の帝国フィランソロピーは：穏健改革派の社会事業にとどまらない、すぐれて政治的な営為だったのであり、二〇世紀前半における南アの歴史を理解するうえでもきわめて重要なテーマ」（二四三頁）と書かれている。ここで問題になるのは、協議会が政治的な意味で南アフリカ史にどれほどの影響力を

持ち得たのである。本書にもあるように帝国フィランソロピーの主要人物たちは、イギリス本国で言えば自由党急進派ないし労働党の関係者と位置付けられた。だが二〇世紀のイギリスでも南アフリカでも、リベラルは「消滅しゆく人々」だった。また、南アフリカでは労働党も、イギリス系労働者に特化したこともあり次第に衰退していった（そもそも、アフリカ人の労働問題よりイギリス系の利害を優先した南アフリカ労働党は、協議会のメンバーと相容れなかった）。特に南アフリカで、協議会のメンバーが現実政治に影響力を持ち得たとは言い難いだろう。

そのような事情があつたのことなのかもしれない。本書では協議会のイデオロギーが、白人たちの国民意識を創出しようとする南アフリカ主義のヴァリアントである、という議論が援用される。協議会のイデオロギーが南アフリカ主義の、アフリカ人にも包摂的なヴァリアントである点に関しては評者も同意する。他方で南アフリカ主義の研究者たちは、何でも南アフリカ主義のヴァリアントと見なして対象を実像以上に大きく捉えがちで、本書にもそうした傾向は残る。例えば、一九四三年にANNC（アフリカ民族会議）が大西洋憲章を掲げた斬新な南ア主義の表明」（三二七頁）とされる。それに協議会のメンバーが寄り添う姿勢を示そうとしたからなのだろうが、アフリカ人ナショナリズムの文書と見るほうが自然ではないか。

こうした南アフリカ主義解釈の拡大は、「協議会に代表される「リベラルないし社会民主主義的な南ア」は、アフリカ人ナショナリズム、アフリカーナーナショナリズム（アパルトヘイトと言

い換えてもよい）」と並び、一九四〇年代の南アにひらかれていた三つの有力な将来像のうちのひとつであつた」（三三〇―一頁）という主張へとつながる。この主張は本書というよりも、もとをたどれば、南アフリカ主義もしくは「リベラルないし社会民主主義的な南ア」の代表的研究者たるソール・デュボウのものである。しかしこれも、一定程度までは首肯できるとしても、どちらかと言えば過大評価ではないか、と評者は考へる。例えば本書もデュボウも、一九四二年の南アフリカ人種関係研究所の会合で、首相のヤン・スマッツが「隔離もまた困難に直面した」と言明したエピソードを取り上げる（本書三二九頁）。首相がそのような発言をしたとすれば「リベラルないし社会民主主義的な南ア」はたしかに有力な将来像だったのだろう、と思われるかもしれない。ただしスマッツの発言は、フランス領マダガスカル近海に日本海軍の潜水艦が出没して南アフリカの白人支配層が軍事的脅威を感じ、アフリカ人労働運動との協調を図る文脈でのものだった。実際、南アフリカ軍がマダガスカルに侵攻し、日本海軍と連携する恐れがあつたヴィシー政権の守備隊を破つて脅威が遠のくと、スマッツはスタンスを後退させている^②。

このように考えると、協議会が南アフリカ政治に及ぼした影響力を推し量る際、南アフリカ主義の議論に依拠し過ぎることは必ずしも適切とは言えないのではないだろうか。他方で、協議会と密接な関係を有していた南アフリカ人種関係研究所は、二〇世紀後半になつても反アパルトヘイト派の橋頭堡として一定の役割を果たしつつけた。同研究所にアフリカ人ナショナリストたちがどう関わつたのか、丹念に追っていくと影響力を推し量りやすいの

かもしれない。

以上雑駁な感想を書き連ねたが、本書がイギリス史、イギリス帝国史、南アフリカ史のいずれにとっても得難い成果である点は確実である。大澤氏の努力に敬意を表するとともに、本書が多くの人に読まれることを念じつつ筆を擱きたい。

① 大澤広晃「国内史」と「帝国史」の総合を目指して」雪村加世子・正木慶介編「帝国史はどこへ行くのか?——新たなイギリス帝国史研究の視座の提示——」『西洋史学』二六四号(二〇一七年)、九八頁。

② なお、戦争の潮目が連合国の優位に傾き始めるとアフリカ人の立場が悪化の兆しを見せたことについては、本書三三九頁以下でも言及されている。

(A5判 三七八頁 二〇二四年二月)

名古屋大学出版会 六八〇〇円+税)

(中央大学文学部教授)